

社会科教育講座 太田 満 准教授



移民学習と社会科

キーワード 移民 / 残留 / 満蒙開拓

どのような研究をなぜ行っているか

今日のグローバル化の進展と共に、世界的規模で移民が増加しています。私たちの地域社会においても、外国にルーツをもつ人々が暮らしている状況は珍しいものではありません。このような社会にあって、移民と移民を受け入れる側の共生に向けた学習論が教育界で提言されてきました。

ただ、私たちが移民について学ぶ時、「移動する人々」の存在に注目しがちです。しかし、この世界には、移動したくても「移動できない／できなかった人々」もいます。私は、後者の人々の存在にも着目した移民学習が、現代社会をよりよく理解するためにも必要だと考えています。

日本で「移動できない／できなかった人々」といえば、中国残留日本人が思いつきやすいのではないのでしょうか。しかし、残留を余儀なくされた日本人は、中国にだけいたわけではありません。サハリンやフィリピンなどにもいました。中国以外の地で残留した日本人の存在は、なかなか知る機会がありません。私は、現地に住む残留日本人に会いに行き、話を聞き、聞き取ったことを記録し、記録したことの教材化を検討しています。

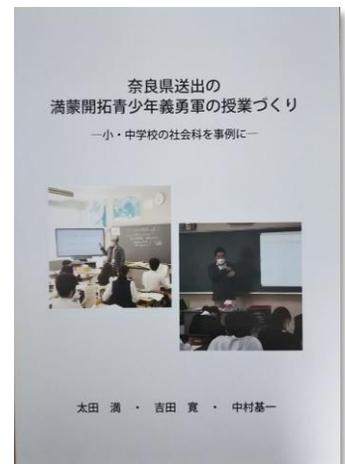
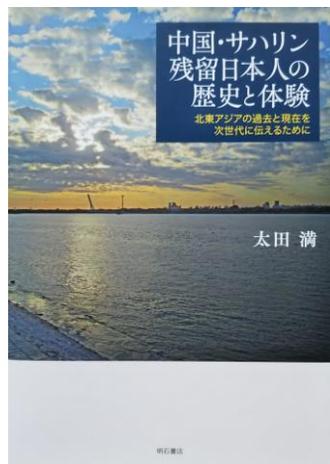
また、日本で移民といえば、在日コリアンなどのオールドカマーや、日系ブラジル人などのニューカマーが想起されやすいと思いますが、日本から渡っていった移民の存在も忘れてはならないと思います。先の中国残留日本人に引き付けていえば、満州移民（とりわけ満洲農業移民）はその一つです。

満洲農業移民（満蒙開拓団や満蒙開拓青少年義勇軍）については、小・中学校の社会科教科書でも取り上げられていますが、なぜ満州に渡ったのか、満州で戦中・戦後をどのように暮らしをしていたのか、などの問いに答えられる教科書はあまりありません。満洲農業移民は国策として、朝鮮半島を含め、日本の各道府県から送出されています。本大学が位置する奈良県も同様で、奈良県の事例についても調べながら教材開発の可能性を探っています。

研究成果をどのように活用し、 どのような貢献ができるか

本研究を通しての記録は、当事者が語った他にない記録として意味をもち、当事者が置かれた社会状況等を考える手がかりになると考えます。

また、本研究を通しての教材開発は、小・中学校における社会科教育や国際理解教育に貢献できると考えています。



これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

2021年度は、群馬満蒙開拓研究会で「群馬県送出の満蒙開拓青少年義勇軍」と題する講演を行いました。また、奈良教育大学附属中学校の社会科教員と連携しながら、奈良県送出の満蒙開拓青少年義勇軍を取り上げた授業開発研究を行いました。2022年度は、市民ひろばなら小草の「大人の学び講座」で「中国残留を考える」「サハリン残留を考える」をテーマとした企画・講演を行いました。

